

河口ヨシ原保全のための啓発活動

NPO法人 藤前干潟を守る会
理事長 亀井 浩次

愛知県

2011年6月より2012年5月にかけて、標記助成事業として連続的な活動を行った。以下、報告する。

[事業開始までの経緯]

私たちが通常活動の場としている藤前干潟は、名古屋港の奥、庄内川・新川・日光川の河口部に位置する。干潟部分は、瀬戸・多治見などの陶土地帯に水源をもつ庄内川が運んだ粒子の細かい泥からなり、かつては伊勢湾奥に広大に広がっていた干潟（『万葉集』に「あゆち潟」として記載）の最後の残存部分となっている。1980～90年代にこの干潟が名古屋市のごみ処分場の予定地となり、当会をはじめとする市民の粘り強い活動によって計画中止（1999年）・保全に至ったことは周知のことである。現在は国指定鳥獣保護区・ラムサール条約登録地（2002年登録）として保全されている。



伊勢湾側上空から見た藤前干潟と河口ヨシ原

（写真：環境省／亀井加工）

さて、今回の事業の対象とした「河口ヨシ原」は、おもに庄内川の河口両岸部に存在する。特に左岸には河口より3kmほど上流までの間に広く発達し、最大で300mほどの幅となって名古屋市域で最大規模のヨシ原を形成している。また庄内川右岸は並行して流れる新川との流路を分ける導流堤の脇に形成され、堤防管理のために管理者である国土交通省の職員が入る以外にはほとんど人の立ち入りがないため、自然度の高い状態が維持されている。いずれもラムサール登録部分の北側に隣接し、国指定鳥獣保護地区となっている。

「藤前干潟を守る会」は、当初の活動目的が行政の埋立計画に対して保全を実現することにあつたため、活動範囲も埋立計画の対象となった干潟部分のみ

であった。そのため、対象地の外にあったヨシ原部分については活動の範囲外であり、むしろ主張を明確化するために意図的に無視してきたという経緯があった。しかし、当初の目標が達成され、保全が実現するとともに、周辺部まで含めた「生態系としての保全」を考えることが次の課題となってきた。そこで干潟部分に隣接し、連続しながら異なる自然条件を形成するヨシ原部分が新たな活動範囲として検討されるようになった。

これまでヨシ原を対象として活動してきたのは、おもに野鳥観察を楽しむグループである。このヨシ原は中型のタカであるチュウヒ *Circus spilonotus* が繁殖しているという情報があり、愛好家の間では知られた場所であった。チュウヒは環境省レッドリストにおいて「絶滅危惧 I B 類」に分類され（イヌワシ・クマタカ等と同ランク）、国内での繁殖つがいは 30 ～ 40 程度とされる。営巣には広い草地が必要で、安全に巣が作れるだけの地表面と巣材となる植物、食糧となる小型哺乳類などが豊富かつ安定的に得られることが条件となる。秋田県八郎潟干拓地や石川県河北潟などが有名な繁殖地だが、名古屋近辺では木曾川河口左岸の木曾岬干拓地が知られ、そこからの移動により庄内川河口ヨシ原でも営巣するようになったようである。野鳥観察は基本的には陸側（堤防上）から望遠鏡等により行うため、ヨシ原内に立ち入ることは少なく、観察場所ではあるもののフィールドの状態については不明な部分が多かった。

数年前から、庄内川護岸堤防の改修工事計画が具体化してきたが、その際に堤内地のヨシ原部分への工事の影響を検討していく中で、これまで知られていなかった生物相や生態が明らかになり、ヨシ原の保全を訴えていく必要性を認識し、今回の事業につながったものである。この護岸堤防は、



木曾岬干拓地のチュウヒ

(写真：日本野鳥の会愛知県支部)



庄内川左岸堤防上からのヨシ原

1959年の「伊勢湾台風」での甚大な被害を受けて直後に整備されたものであるが、建設後50年を経て老朽化が目立つようになり、また昨今の耐震性能強化の流れを受けて改修されることとなった。改修工事の事業者は国土交通省の庄内川河川事務所であり、工事箇所が鳥獣保護地区内であることから、管理者の環境省中部地方事務所と調整のうえ進められた。ちょうど、この地域に関しては、保全の経緯



堤防工事の様子（庄内川左岸）

もあって、行政・研究者・市民団体が対等の立場で話し合う「藤前干潟協議会」が設置されており、当会も構成メンバーとしてその席上で情報交換をしつつ意見を述べることができた。

堤防改修工事を行う際に、ヨシ原部分に影響を及ぼすと思われる点としては、

- ・ 堤防内現行堤防の下に作業用スペースおよび通路を作る必要があるが、それにより数mの幅でヨシ原上部を埋めることになる。
- ・ 堤防最下部地盤に鋼矢板を打ち込み、それを構造物の一部として堤防を支えるという工法とのことで、その矢板により堤内と堤外を行き来している水（地下水）の流れを遮断することになる。

等が想定された。そこで、協議会の場で検討し、事業者・工事業者等と共同で生物調査を行い、悪影響を軽減させ得る方法について調整をはかることにした。

2008年以降、継続的な生物調査を行い、特に「カワザンショウガイ類

Assiminea」の生息状況について確認した。干潟に生息する小型の巻貝類で、生態上の特徴として、水面からの距離（乾燥度）に応じて種ごとのすみ分けが行われていることがある。大きさ（殻長）は大きくても5mm程度、茶色を基本として目立つ模様や形態的な特徴も少なく、見落としがちな生物であるが、意識して見るとヨシの根元や泥の上などにそれこそ無数



ヨシ原のカワザンショウガイ類

に生息している。カワザンショウガイ *Assimineia japonica* のほかに、クリイロカワザンショウ、ヒラドカワザンショウ、ムシヤドリカワザンショウ、ヨシダカワザンショウなど数種があり、乾燥度に応じて分布しているわけだが、その内で最も水面から遠いところに住んでいるのがヨシダカワザンショウである。水面から最も遠いということは最も陸域に近いということであり、埋め立て等の人間活動の影響を受ける可能性が高い。工事開始前から工事中、昨年2月の工事完了後と、6回にわたって生息状況の調査を行った結果、危惧した通り、工事後にヨシダカワザンショウが見られなくなった。これに関しては、一時的な攪乱による変化で環境が安定すれば戻ってくるという意見もあり、もう少し長期的にデータを集めていくしかないが、とにかくこれまであまり注意しなかったヨシ原にも、特有の生態系があり、無配慮な開発や破壊行為がなされないよう保全をはかるべきだという認識が共有された。この調査は事業主体である国土交通省庄内川出張所とその委託をうけたコンサルタント会社、管理者である環境省名古屋自然保護官事務所、そして当「藤前干潟を守る会」が合同で実施し、その結果を翌年度の工法に反映させるなどの成果を得た。



カワザンショウ類の調査風景

[本事業の立案]

以上の状況をふまえて、ヨシ原保全の重要性を広く啓発するためのプログラム開発が必要であるとの意見が出され、いくつかのアイデアが検討された。しかしこれまであまり活動フィールドとして使用していなかったため、それに対応するための技術や道具類が十分でなく、補強のための資金が必要となった。幸い、「タカラハーモニストファンド」の助成が得られることとなり、検討にのぼったプログラムのいくつかを実施することができた。以下に報告する。

[実施プログラム]

1. インタープリテーション技術研修ワークショップ

(2011年7月16日実施)

当会はこれまでも干潟部分での観察会などを実施してきたが、新たな

フィールドで参加者の興味を引き出すための技術を高めることを目的に、インタープリテーションの研修を実施した。

プロのインタープリターとして活動している「MUI 自然教育事務所」の猪俣寛氏を講師に、参加者の興味をどのように捉えるか（フッキング）、そしてそこから「見せたいもの」にどのように誘導するか、といった実践的なワークショップが展開された。当日は悪天候のためヨシ原に出ることはできなかったが、室内で講師の用意したさまざまな興味喚起グッズを使い、具体的に目標とする話題につないでゆく手法を学ぶことができた。

その後、各自でプログラム作りを行い、それぞれが発表した。いずれも実際にヨシ原で使用することを想定した内容で、会としての「持ちネタ」の幅が広がったことを感じた。スタッフ向けの研修なので一般の参加者はなかったが、今後の一般向け企画の中で還元していけるものと思う。



(写真上) 小道具を活用した猪俣氏の指導



(写真下) 各自のオリジナルプログラムの発表

2. ヨシ笛講習会（2011年9月17日実施）

ヨシの利用法としては、「ヨシ簀」がよくあげられる。『名古屋市史』（名古屋市発行）によれば、庄内川下流地域は「ヨシ簀発祥の地」とのことだが、「産業としてのヨシ簀作成」が始まったということだろう。良

質なヨシが大量に採れていたことがわかる。当会では以前から、「ヨシ編みワークショップ」を開催し、実際のヨシ簀作成器具を小型化したものを使って、コースターなどを作成していたが、もっと多様な活用法について伝える方法を模索する中で、「ヨシ笛」をとりあげることにした。大阪より「葦笛マイスター」の西川・金本・鈴木の3名の講師を迎え、午前・午後の2回、ヨシ笛の作り方から演奏まで、実習をしながら指導していただいた。全国的にみると、琵琶湖南岸を中心にした滋賀県と、大阪湾の南を中心にした大阪府に多様なヨシ文化がみられる。今回の講師も堺で活動しているグループで、古来和歌などでヨシの名所として知られた「難波江」の伝統を感じさせるものがあった。

参加者は午前10名、午後11名の延べ21名。穴の開け方から音階の調整、音の出し方など、丁寧に教えていただき、ヨシの持つ可能性の広さを実感した。ただ、残念な点は、私たちのフィールドにあるヨシは笛として使用できないということである。笛としての使用に耐えるためには、ある程度太さと堅さが必要で、それはそのために条件を整えて育成しなければならないが、庄内川河口ではそのような管理がなされていない。そのため細く強度のないヨシになっており、実用に適さないとのことであった。私たちがヨシ原をどのように利用していくかということも含め、今後の展開に多くの示唆を得た講座となった。



(写真上) ヨシ文化についての説明



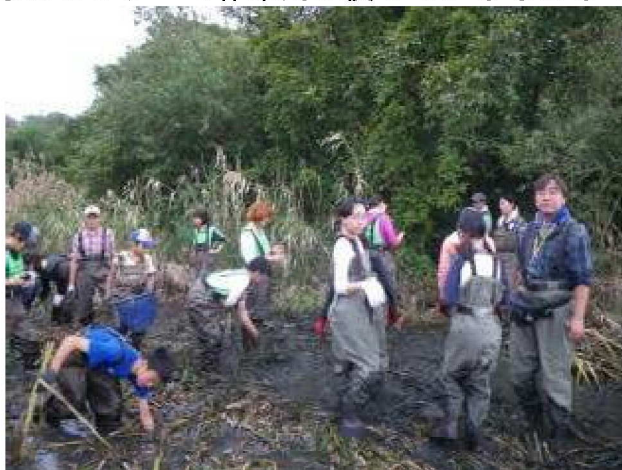
(写真下) ヨシ笛の演奏実演

3. ヨシ原観察会（2011年11月3日実施）

以前から、会としてヨシ原に多少踏み込んで観察会を実施することはあったが、いつも「足回りをどうするか」が頭を悩ませるところであった。通常、干潟での観察会の際は、寒冷期以外は「はだし」を基本としている。危険な貝殻等が少なく、また泥の感触を実感してもらうのに最適であるというのが理由だが、ヨシ原の場合は折れた茎を踏み抜く危険性が高く、また巻貝類が多く生息していることから、現実的に不可能である。長靴着用を勧めてはいるが、特に子ども用は野外用のしっかりした長靴がなく、雨靴のようなもので入って泥に埋まったり、すぐに脱げたりして余計なエネルギーを使うことが多かった。干潟の観察は干出時間の関係で春～夏に実施する（昼間の干出は3月～9月に限られる）ことが多いが、ヨシ原はむしろ秋・冬に実施する（夏は虫が多く、また風通しが悪いため暑い）ので、水の冷たさへの対処という面からも、主催者としてしっかりした装備を準備すべきだということが懸案事項であった。

今回の助成で購入したのは子ども用のウェーダー（胴長靴）である。ウェーダーの基本的な用途は魚釣り用、または水産関係の作業用で、あまり子どもが使用するような場面は想定されない。需要がなければ、それに対応したサイズの商品も作られないわけだが、探した結果、2社ほどが子ども用の製品を出している（うち1社は現在製造中止）ことがわかった。大人用のものはいろいろ出ており、価格にもかなりの幅がある。頻繁に使う人は「消耗品」と考えて安価なものを大量に購入するとのことで、私たちのセンターで作業用に使っているものも1足980円である。しかし子ども用は選択の余地がなく、いきおい価格も定価販売となる。今回は試験的に10足ほど購入し、使用に当たっての注意点などを検討することとした。

使用したのは11月3日の観察会。主催企画のため講師料等の支出はなく、本事業の関連として



ウェーダーを履いてヨシ原に入る参加者

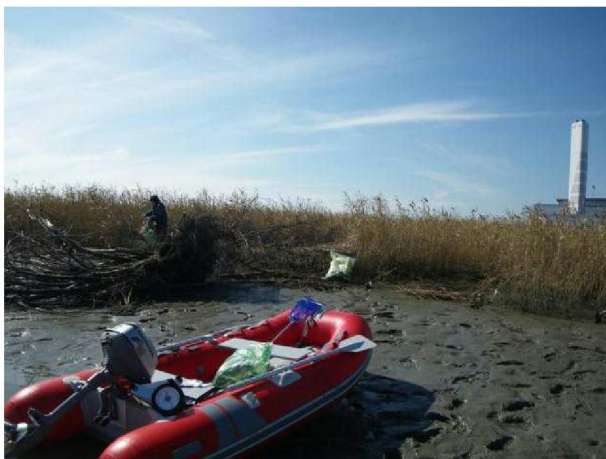
は助成金購入ウェーダーの試験使用ということになる。子どもたちにとっては、ウェーダーの着用は初めての体験であり（大方の大人も同様だが）、それだけでひとつのアクティビティになるほどの魅力がある。ヨシ帯から水の中まで、自由に行動できるというのも新鮮な体験であったようで、今後大いに活用できるという手応えを感じた。ただし、調子に乗って走り回ったり、故意に水の深いところに行こうとするケースもあり、高揚してコントロールが効かなくなる場合の対応など、十分検討しておく必要を感じた。大人の場合、干潟のあまり出ない時期にウェーダーを着用して水中を観察するという使い方もしており、この道具によってプログラム展開の幅が広げられそうな期待感を感じている。

4. クリーンアップ作戦（2011年11月12日実施）

私たちが通常活動しているフィールドは、「干潟」という海の一部といえる場所だが、これまで船を使った活動をしていなかった。基本的には干出している時間に活動しているため、船を使わなくてもなんとか済んでいたものの、水上移動の必要性を感じることもしばしばあって、気軽に使えるボートの確保は大きな課題であった。特にヨシ原をフィールドとする場合、陸側からは近づけないような場所も多く、ボートなしでの活動には限界があるという意見が出されていた。今回の助成金で、小型ではあるがエンジン付きのゴムボートを購入し、川の側からアプローチできるようになったことは非常に喜ばしい。一般にボートの操縦には船舶免許が必要だが、当会のスタッフのほとんどは免許を持っていないため、小型・小出力で沿岸部のみの使用であれば免許不要という制度の適用を受けられる機種を選定した。エンジン出力は約2馬力で、流れや波が強い場所では苦しいが、当会が活動している湾奥の河口部のような条件であれば十分使用できる。今回は、試験的な使用として、干潟周辺の大がかりなごみ拾いイベント「クリーンアップ作戦」に参加することにした。

藤前干潟は、そもそも廃棄物処分場の計画地となったことから保全運動が動き出し、計画を進めようとする行政と市民団体の対立を経て保全されるようになったという経緯がある。それが名古屋市の廃棄物行政の大転換をもたらし、結果として市は「環境首都」をめざすという、市政全体の方向付けを作るきっかけにもなっている。そのように「ごみ」との関連の強い場所というイメージもあって、毎年2回（春と秋）、

「クリーンアップ作戦」というイベントが開かれるようになった。庄内川流域で活動している団体などが集まって実行委員会を作り、毎回2000人以上の参加者が集まる。ごみは不法投棄というより、川からの漂着ごみが大半を占めるが、それがヨシの間に入って引っかかり、ヨシ原の中に堆積していく。参加者は陸側からごみを拾うことになるので、そこに関してはきれいになるものの、川の近くには来られないため、ごみは手つかずのまま残されることになる。当会は実行委員会の中核メンバーということもあって、毎回積極的に参加しているが、今回は2名がボートを使って川からのごみ拾いをやってみることにした。ボートは定員4名ではあるが、拾ったごみを積んでくるスペースも必要なため、出勤は2名となった。川から見ると、陸からでは見えないところのごみがよく見える。着岸・上陸して、ヨシの間のごみを回収するが、量が多すぎてとても処理しきれない。堤防上には大勢の参



(写真上) ボートで上陸しヨシの間のごみを回収する。

(写真中) 堤防上の参加者。水際まで下りられない。

(写真下) 回収したごみ。積載量とのバランスが
難しい。

加者がいて作業しており、うまく連携がとれると効率がよくなると思いつつ、とりあえず船内に積めるだけ集めて帰還した。移動しながら、先日の豪雨の際の大型流出物の様子などもチェックしながら戻ったが、このような「見回り」の機能もボートにあることを確認して、今後どのように活用できるかさまざまなアイデアを考えた。

5. 講演会「津波被害を受けた干潟環境の変化と底生生物への影響」
(2012年3月31日実施)

2011年3月11日の地震・津波災害は、私たちの社会全体を変えてしまうほどの衝撃をもたらした。どうしても人的な被害に目がいきがちで、報道されるのもほとんどが人間活動にかかわるものだが、自然環境への影響はどうなっているのか、なかなか情報もなく気がかりな状態が続いていた。特に私たちが活動フィールドとしているのがもっとも津波の影響を受けやすい沿岸部であり、近い将来ほぼ確実に地震被災地となるとされている東海地方太平洋岸の住民としては、当然強い関心をもっておくべき内容でもあった。

そのような中で、東北大学生命科学研究科の鈴木孝夫氏より、震災後間もない時期から行っていた調査の結果がとりあえずまとめられるようになったとの情報をいただいた。鈴木氏は干潟生態系を専門分野とし



(写真上) 鈴木氏(左)の講演を聴く参加者

(写真下) 津波被害のプレゼンテーション

ており、「干潟市民調査」の手法を開発して普及に努めていることから当会とも以前より連絡があり、その関連で情報を得たものである。当初の助成事業計画にはなかったが、私たちの活動にとって非常に重要な内容であると判断し、急遽講演会を企画した。仙台から講師を呼ぶ都合上、ある程度の交通費・宿泊費がかかることから、助成金を活用しなければ実現が難しかったと思われる。

講演の中では、特に仙台湾の蒲生干潟や松川浦などの事例をあげながら、津波前の様子と被災直後の状態、そしてその後の変化の状況が報告された。本事業のテーマであるヨシ原については、津波で表土ごと流された場合の回復状況や、生物の避難場所ないし生態系再生のための足がかりのような役割を果たしていることが報告され、興味深いものがあった。考えてみると、今回のような自然災害は、昔からある程度の間隔をおきながら繰り返されてきたわけで、そのたびごとに自然は再生している。今回蒲生干潟では、干潟の奥に堆積していたヘドロ（還元的な状態の有機物層）が一掃されてきれいな砂地が現れ、そこにゴカイ類が増殖するなどの好ましい変化をもたらされたとのことだが、そのように人間中心的な観点からは見落とされがちな影響（「被害」ばかりではない）も忘れてはならないことを改めて実感した。ただし、これはあくまでもマクロ的な自然状態についての変化であって、ミクロ的に見るともっと長いスパンで検証しなければならない部分も多い、特に人為的な攪乱が加わった自然がどのように再生するかは、どの状態を着地点とするかによって評価が変わってくる（被災前の状態になればよいのか、本来の生態系に戻すべきか）という指摘などは、都市部の自然を相手にしている私たちにとっても、意識しておかねばならない問題であると考えさせられるものがあった。

ともあれ、津波被害からの回復のプロセスは、私たち自身の防災意識とあわせて、今後しばらく関心を寄せていくべき問題であることを確認することができ、有意義な企画となった。

6. 現地視察「長良川河口堰建設後のヨシ原の状況」

(2012年5月26日実施)

私たちのフィールドである藤前干潟は、歴史的にみれば木曾川・長良川・揖斐川の「木曾三川」の河口に発達した広大な干潟の一部であり、新田開発や干拓・埋め立てによって分断された状態になってはいるが、本来、連続した生態系として考えていくべきものである。干潟環境と

しては、東端というべき名古屋港の藤前干潟と、西端となる朝明川河口の高松干潟、あとは鍋田干拓地の地先などにわずかに残るのみだが、ヨシ原はそれぞれの河川の下流・河口部などにある程度残っている。今回の視察では、河口堰建設によって人為的な影響を受けた長良川と、隣接しているが自然状態が保たれている揖斐川を比較して、ヨシ原の機能や保全の意義などを考えることにした。

河口堰のゲートが閉じられてから16年、長良川河口部の自然条件は大きく変容した。海からの塩水の遡上を防ぐのが目的であるため、干満の影響を受けることがなくなり、水位はほぼ一定の状態を保つようになった。また流れがなくなったことにより、有機物の堆積・沈殿が進み、富栄養化して植物プランクトン（アオコなど）の大量発生も頻発するようになった。そのような条件下で、ヨシ原がどのように変化したか実際に検証するのが今回の趣旨となる。

今回、「中部の環境を考える会」に依頼して、千頭克彦氏に講師を引き受けていただいた。長良川下流域の植生調査を続けており、河口堰建設前後の変化を継続的に記録しているとのことである。長良川右岸の堤防は、揖斐川左岸と共用する「背割堤」の形になっている。近世以前、木曾三川の下流域は網の目のように分流して氾濫を繰り返す広大な湿地帯であり（藤前干潟に流入する日光川もそのひとつ）、幕命によりそれを改修した薩摩藩のいわゆる「宝暦治水」で作られたのがこの背割堤である。堤防をはさんで西が揖斐川、東が長良川となっ



(写真上) ヨシ原の消滅した長良川の右岸

(写真下) ヨシ原の広がる揖斐川の左岸

ており、河口で合流する手前部分に長良川河口堰がある。そのため、堤防上に立てば、堰で流れのなくなった長良川と、自然流下している揖斐川を一度に見渡すことができ、比較観察に便利な場所となっている。

結果としては、見事なまでの対比が見られた。しっかりしたヨシ原が発達している揖斐川に対し、長良川は群落としてはほぼ消滅、ところどころに数株固まって生えてはいるが、時間がたつにつれて小さくなる残存部で（変遷を示す写真資料あり）、あと数年のうちに完全になくなるだろうとの説明を受けた。原因はいくつか考えられるが、決定的なのは水位が高いままで変動しないことのようなのである。堰ができる以前にヨシ原があった場所は湛水によって水没し、また以前は潮の干満によって絶えず変動していた水位も一定に保たれるため、根茎部分に酸素が供給されず死滅していったと考えられる。そのためヨシのもつ「水質浄化機能」も働くことなく、水質の悪化が加速しているとのことであった。その違いは、50mほど西に移動して揖斐川のヨシ原に入ってみるとよく実感できた。背丈を越す高さのヨシが群生し、足もとにはベンケイガニやアシハラガニの巣穴が無数に開いている。川の本来あるべき姿はどのようなものかを体感し、私たちのフィールドでヨシ原を保全していくことの重要性を再確認することができた。

7. その他の事業

以上6件の企画を、「タカラハーモニストファンド」助成金を活用したプログラムとして実施したが、これらは同期間に当会が実施した主催プログラムと有機的な関連をもたせながら実施している。「主催プログラム」は当会の本部予算の中で実施するため助成金を使用せず、したがって助成事業としての扱いはしないものの、会の意識としては一連の「ヨシ原プログラム」を構成するものとして、相互に関連させてとらえている。主催プログラムのうち、特に本助成事業と関連が深いのは以下の2件である。

・ヨシ原のカニ観察会（2011年9月11日実施）

庄内川河口左岸のヨシ原最先端部で実施。ヨシ原のカニ（アシハラガニ・ベンケイガニ）と干潟のカニ（ヤマトオサガニ・チゴガニ・コメツキガニ）の両方が観察できる場所で、それぞれのカニの行動・形態・生息場所の違いを観察した。この観察会において、7月16日に実施した「インタープリテーションワークショップ」（前述事業1）で作

成したカニの見分け方プログラムを使用してみた。いくつかの課題が見えてきたので、今後さらに実用性を高めていきたい。またこの直前に助成金購入物資のウェーダーが届いたため、ここでの使用を検討したが、時期的に暑すぎると判断して11月（前述事業3）使用に変更した。

・ヨシ刈り（2012年1月8日実施）

ヨシ笛講習（前述事業2）で指摘された「このヨシは使えない」という状況を何とかしようということで、まずは定期的な手入れをすることにした。夏の間成長したヨシを冬に刈り取り、翌年新しく生えてくるヨシの成長する空間を確保してやることで、太く強い茎が作られる。かつては広く



刈ったヨシを束ねて運び出す

行われていたヨシ原の手入れだが、プラスチック製品の普及によりヨシの需要がなくなり、手入れをする必要もなくなって現在ではほぼ廃れた習慣になってしまっている。しかし水質浄化の観点からも、ヨシを水中から除去するのは必要な過程であり（水中の栄養塩類を吸収して生育したヨシがそこで枯れてしまえば、吸収したものを水中に戻すことになり浄化にならない。陸上に移動させることではじめて浄化が完成する）、ヨシ原の機能を考えるうえでも有意義な取り組みといえる。とりあえずは実験的に一区画のヨシを刈り取り、次年度以降どのように再生するか観察する。刈り取ったヨシは乾燥させ、いろいろなクラフトの素材として活用する予定である。

[事業を終えて]

1年間通して、ヨシ原に関するさまざまなプログラムを実施し、私たち自身このフィールドに関する多くの経験や知識を得ることができた。ヨシ原保全の重要性を伝えるためには、伝える側にそれだけの蓄積がないと説得力をもたない。その意味で、これらのプログラムは当会スタッフの力量向上につながると

ともに、自信をもって説明するだけの材料を与えてくれるものとなった。さらに、ヨシ原で活動するための道具類を装備できたことや、また実験的なフィールド活動の中で本格実施に向けての注意事項などを確認できたことも有意義であった。

ヨシ原の保全是、1年ないし数年といった短い期間で行えるものでもなく、これから10年、20年といったスパンで展望をつくりながら進めていくべきとりくみである。今回の事業で得たいろいろな知見や技術を活かしながら、庄内川河口ヨシ原の保全を進めていきたい。

私たちの活動は、直接には庄内川河口地域の環境保全を目的としているが、水を介してつながる伊勢湾全域、さらには渡り鳥の移動ルートとしてつながる東アジアの湿地全体の保全も視野にいれている。今回の事業で、長良川・揖斐川の河口ヨシ原の現状を見、また東北太平洋岸の沿岸ヨシ原の津波被害と再生についても知ることができた。直接の私たちのフィールドではないとはいえ、さまざまな要因でつながっている自然環境であり、決して無関係なものではない。広い視野で自然をとらえ、全体としての保全を考えていくべきという思いを新たにした。

2年前の2010年10月、名古屋で「生物多様性条約COP10」が開かれ、生物多様性の保全をめざす「愛知ターゲット」が採択された。この会議を誘致することになったきっかけの一つに「藤前干潟の保全」があったことは周知の通りだが、私たちはそのような経緯の責任の一端を担う立場にあることを深く認識し、愛知ターゲット、特にその「短期目標」（2020年までの10年間の目標）を実現すべき取り組んでいきたい。今回の助成事業「河口ヨシ原保全のための啓発活動」を糸口にして、ヨシ原の生物多様性保全活動を強化していきたいと思っている。